土が育む実りを未来に残すために

新春対談

三鷹市は「緑と水の公園都市」を目標にして、緑地や公園、農地の保全とともに、市民が農業にふれあう施策を展開しています。俳優の永島敏行さんは、映画や舞台で活躍しながら、農業をキーワードに秋田や千葉、長野の農村と都市を結びつける活動を行っています。対談の話題は、農業の活性化や地域の再生、そして三鷹市が目指す新しい時代のコミュニティづくりへと広がりました。

清原慶子市長

Keiko Kiyohara

1951年生まれ。慶應義塾大学、同大学院で学んだ後、ルーテル学院大学文学部助教授・教授、東京工科大学メディア学部教授・学部長を経て、2003年4月に第6代三鷹市長に就任。政府ＩＴ戦略本部有識者本部員、総務省情報通信審議会・国土交通省国土審議会・内閣府国民生活審議会・同中央障害者施策推進協議会などの委員も務め、市民と自治体の立場から国に対して意見を表明している。

食べることをキーワードに

清原　永島さんは三鷹市と調布市の境に住んでいらっしゃるとお聞きしました。この地域を選ばれたのはなぜですか？

永島　僕は出身が千葉なので、自然がある場所に家を建てたかったんです。今の場所は高台で緑が多くて気に入りました。野鳥も多く、冬にリンゴで餌付けしていると20種類以上の鳥たちが庭に来るんです。公園も近いし、遊歩道もある。時間があると、犬の散歩をしながら10キロぐらい歩くんですよ。歩いていると、アイデアも湧いてくるし、台詞も覚えられます。嫌なことがあっても、自然を感じるとき、煮詰まったものが溶けていく。娘が幼稚園に通っていたときには、子どもたちを田植えに連れて行ったこともあるんですよ。

清原　永島さんは農業に関心があるだけでなく、実践されています。農業に携わるきっかけは何だったんですか？

永島　秋田県の十文字町（現在の横手市）での映画祭です。大学時代の仲間と映画祭を立ち上げて、毎年通い始めました。映画祭は監督や役者が主役。でも、地元の人にも主役になって欲しい。そこで、農業体験を企画しました。地元の方々が先生です。それに、子どもも小さかったから泥だらけで楽しむ機会をつくってあげたかった。

清原　でも、楽しむだけでは終わらなかったんですね。

永島　次第に食のことについて考えるようになりましたね。僕のキーワードは食べることです。だって、食べない人はいないでしょ。食べることは必要で、そして楽しい。真剣に食べることを考えれば農業や食の問題は改善されていくはずです。

清原　三鷹市には学校農園が多いですし、保育園や幼稚園の園児も農業を体験しています。食べ物が生まれるプロセスを知っていることは、本当に大切なことです。永島さんの言う通り、食べることほど万人に共通していることはありませんよね。

永島さんが実行委員長を務める青空市場
ここでは生産者と消費者が直接語り合うことができます。

無駄に思えることが豊かな発想を育む

清原　永島さんは三鷹の自然を気に入ってこの地に住まわれたとおっしゃっていましたが、永島さんの視点で三鷹市の行政に何か提案はありますか？

永島　木製の「道しるべ」を設置したらよいと思いますね。「こっちに行くと公園」「あっちに行くと畑」みたいな感じで、歩いている人たちを、いつもとは違う道に誘導できるし、知らないお店も発見できますよ。

清原　途中下車の発想ですね。

永島　そう、寄り道です。都市では、便利なことばかり考えるけど、無駄という発想がない。一見無駄に思えることが、視点の違う発想を生んでいきます。野菜の無人販売所のマップがあってもいいですね。ぜひ、子どもたちにつくってほしい。自分たちが地域で自慢できるものを発見できますからね。

清原　生活や環境の面では何かありますか？

永島　遊歩道に水辺があったら楽しいと思いますね。道の下は暗きょでも、ちょっとした小川が流れているといい。カルガモなんかが来て、子育てをしてくれますよ。きっと、人も集まります。公園をつくったからこれでいいというのではなく、そこに人が集まる仕組みをつくって初めて事業が完成するはずです。世代を超えた人々が集まれる井戸端のような場所が、これからは大切になっていくと思いますよ。

清原　新川にある丸池がそういう場所です。丸池は、市民のみなさんの提案による市民参加のプロジェクトとして復活したんですよ。また、三鷹市では、昭和40年代半ばからコミュニティセンターを新たな交流の場、活動の拠点として、市民のみなさんの設計でつくってきました。そういえば、永島さんは、コミュニティセンターの運動会にも参加していただいたんですよね。

丸池公園　二期整備のワークショックで提言された模型を囲む子どもたちと市長

永島　リレーで1位になって怒られました（笑）。子どもを抜いてしまってね。

子どもを地域で育てる

清原　三鷹市では、小・中一貫教育を地域と一緒にやっていくコミュニティスクールを実践し始めています。地域に開かれた学校教育です。時代は変化していますが、学校を中心としたコミュニティは、子どもだけでなく、大人も、祖父母も、子どものいない人も集まるということが大切だと思います。

永島　僕もそういうことには、ぜひ協力しますよ。自分の子どもが東台小学校を卒業するときには、"そつたい（＝卒業対策委員）"をしていましたし、先日も、東台小学校で山村留学のことを話したんですよ。これからは、コミュニティというものをきちんと考えていかなければなりません。

清原　お子さんが卒業されても、地域の方が関わってこそのコミュニティスクールですから。

永島　その通りですね。東台小学校では「地域が子どもを育てる」をテーマに、小谷で山村留学した都会の少年が成長していく過程を記録したドキュメンタリーを観ていただいたんです。最初は寂しがって、ゲームをしたがっていた少年が、1年間で顔つきが変わっていくんですよ。少年から大人にね。子どもは地域で育つものなんです。

清原　子どもを地域で育てるということで言うと、三鷹市では、特に0歳から就学前の子どもたちに対しても、できる限り地域が関われる、保護者だけが子どもの責任を担いすぎないように、支えあえるような体制をつくっています。小学校に入る前から、地域を実感できる関わりをつくっていければと思い、施策を展開しているところです。

永島　僕は役者で留守がちだったから、地域の人たちに助けられたところが大いにあります。これからは自分が何ができるかですね。

清原　これからも、永島さんの活動の一つとして、どうぞ三鷹市とのつながりを広げてくださいね。どうもありがとうございました。

永島　敏行さん

Toshiyuki Nagashima

1956年、千葉県生まれ。俳優。映画・テレビ・ラジオ・舞台などで幅広く活躍中。ライフワークで米づくりに参加。農業に強い関心があり、定期的に青空市場を開催している。米づくりを題材にした映画にも出演している。現在、食に関する情報番組『産地発!たべもの一直線』（NHK総合）の司会者も務めている。

永島　役者として、そして農業に携わっている者として、全国各地に行くと、農業と異業種を結びつけているプロデューサーが少ないことを実感します。日本で一番弱い職業はプロデューサー業です。映画や舞台の世界でも同じ。昔はすごいプロデューサーがいました。今は、違う職業の人どうしをつなげて、まとめあげていく人が少ないですね。役者や芸能人にもできることがあるはずです。情報伝達の少ない昔の時代、旅芸人たちは今で言うインターネットだったと思うんです。情報を伝える役割を担っていた。それは今でも変わらない。テレビで地方の特産品を取り上げて、「おいしいですね」と言っているだけでなく、都市と地方をつなげたり、宣伝のお手伝いだってできるはずです。

清原　柔軟な考えで、積極的に農業に携わってきた永島さんですが、今年はどんな抱負をお持ちですか？

永島　今年は、「自給自足キャンペーン」をやります。一般の家庭でも簡単にできることからアピールしていくつもりです。例えば、家のベランダでシソを栽培して、食べたとします。するとその方は、シソの自給率の数パーセントを担ったことになる。体験農業で米づくりに参加してもいい。自分が栽培した農作物の量を自給率の数値に置き換えて、食に関する意識を高めていこうというプロジェクトです。

清原　市内の農家でも援農ボランティアをたくさん受け入れている方がいます。ボランティアの方々に自給率の考え方をお伝えしてみます。

永島　食を通じて、みんなで楽しくいろいろなことを考えていきたいですね。

清原　永島さんは三鷹の自然を気に入ってこの地に住まわれたとおっしゃっていましたが、永島さんの視点で三鷹市の行政に何か提案はありますか？

永島　木製の「道しるべ」を設置したらよいと思いますね。「こっちに行くと公園」「あっちに行くと畑」みたいな感じで、歩いている人たちを、いつもとは違う道に誘導できるし、知らないお店も発見できますよ。

清原　途中下車の発想ですね。

永島　そう、寄り道です。都市では、便利なことばかり考えるけど、無駄という発想がない。一見無駄に思えることが、視点の違う発想を生んでいきます。野菜の無人販売所のマップがあってもいいですね。ぜひ、子どもたちにつくってほしい。自分たちが地域で自慢できるものを発見できますからね。

清原　生活や環境の面では何かありますか？

永島　遊歩道に水辺があったら楽しいと思いますね。道の下は暗きょでも、ちょっとした小川が流れているといい。カルガモなんかが来て、子育てをしてくれますよ。きっと、人も集まります。公園をつくったからこれでいいというのではなく、そこに人が集まる仕組みをつくって初めて事業が完成するはずです。世代を超えた人々が集まれる井戸端のような場所が、これからは大切になっていくと思いますよ。

清原　新川にある丸池がそういう場所です。丸池は、市民のみなさんの提案による市民参加のプロジェクトとして復活したんですよ。また、三鷹市では、昭和40年代半ばからコミュニティセンターを新たな交流の場、活動の拠点として、市民のみなさんの設計でつくってきました。そういえば、永島さんは、コミュニティセンターの運動会にも参加していただいたんですよね。

丸池公園　二期整備のワークショックで提言された模型を囲む子どもたちと市長

永島　リレーで1位になって怒られました（笑）。子どもを抜いてしまってね。

子どもを地域で育てる

清原　三鷹市では、小・中一貫教育を地域と一緒にやっていくコミュニティスクールを実践し始めています。地域に開かれた学校教育です。時代は変化していますが、学校を中心としたコミュニティは、子どもだけでなく、大人も、祖父母も、子どものいない人も集まるということが大切だと思います。

永島　僕もそういうことには、ぜひ協力しますよ。自分の子どもが東台小学校を卒業するときには、"そつたい（＝卒業対策委員）"をしていましたし、先日も、東台小学校で山村留学のことを話したんですよ。これからは、コミュニティというものをきちんと考えていかなければなりません。

清原　お子さんが卒業されても、地域の方が関わってこそのコミュニティスクールですから。

永島　その通りですね。東台小学校では「地域が子どもを育てる」をテーマに、小谷で山村留学した都会の少年が成長していく過程を記録したドキュメンタリーを観ていただいたんです。最初は寂しがって、ゲームをしたがっていた少年が、1年間で顔つきが変わっていくんですよ。少年から大人にね。子どもは地域で育つものなんです。

清原　子どもを地域で育てるということで言うと、三鷹市では、特に0歳から就学前の子どもたちに対しても、できる限り地域が関われる、保護者だけが子どもの責任を担いすぎないように、支えあえるような体制をつくっています。小学校に入る前から、地域を実感できる関わりをつくっていければと思い、施策を展開しているところです。

永島　僕は役者で留守がちだったから、地域の人たちに助けられたところが大いにあります。これからは自分が何ができるかですね。

清原　これからも、永島さんの活動の一つとして、どうぞ三鷹市とのつながりを広げてくださいね。どうもありがとうございました。